

# ハイウェイ



hikali

僕は時速140キロで走っていた。

深夜の中央高速上。八王子を抜け、大月に向かう車中は暖かく、そして静かだった。

「怖えよ。もう少し落とせよ、スピード」

「前についているだけだぜ、そんなにでてるか？」

「140キロ」

「暗えからな。前に一台いないと走りにくいし……」

オレンジ路灯のない高速はさながら電灯一つの洞窟探検に思えた。

運転する友人はステレオから流れるお気に入りのポップソングに鼻歌まじり、片手でステレオを操作するたびにぶれる車に、僕はびくびくし、自分が言い出した計画に少なからぬ後悔をしはじめていた。

五時間前、友人から掛かってきた電話に僕は出た。裏磐梯に釣りに行こうという彼の言葉に、酔っていた僕ははしゃいだ。急ぎで仕上げなければならない仕事があった。締め切りが二日後に迫っていた。僕は物語を書いていた。キーを叩く速度計が0キロをさしていた。

冗談半分だった計画が現実になったのは僕の一言からだった。

――どうせなら星、見に行こう。

それからどうやって目的地が野辺山に代わり、電車で一時間半も揺られて彼の家に向かい、深夜の中央高速で脅える事になったのかはあまり正確に覚えてはいなかった。酔いで頭が痛かった。神経がぴりぴりとしていた。車窓から月が出ているのを見つけ、僕は後悔を深めた。

「月が出てるぜ。あー、駄目だ、見えねえよ」

「そうか？　なんかガスって来たな。どれ？」

フロントガラスから月を見上げる友人に僕はまた震える。

「ほんとだな。なんか曇ってねえか？」

「天気予報は完璧。山の上は晴れてるさ」

霧を見ようと窓ガラスから外を見ると、ふいに険しい山々が見えた。

談合坂を通り抜けた辺り。

くろぐろとそびえる峰々が競うようにどっしりと、深い谷の底にちらほら、人家がへばりついていた。車はいつしか山里に呑まれていた。

幽ろなもやにひそむ峻険は、煌々とした月夜にうつろだった。

細い谷筋に川面が白くきらめいた。狭隘と深山は人を拒絶していた。

迫るような近さに僕は窓ガラスを忘れ、山神を、天狗を信じた。

――武田氏が頼みとした要害だ……。

ふいに甲斐のランドサット写真の緑が頭を過ぎった。豊かな甲府盆地を目鼻の先にしながら一度として北条氏が甲府を攻めなかった理由が分かった気がした。

怖いのだ。

道が細い訳ではない。信玄は小田原攻めにその道を大軍勢で行軍した。

恐いのだ。

刀剣、甲冑に身を固めていても、いつ攻め来るとも限らない精強軍に脅えながら長い狭隘を抜けるのは勇気がいる事だろう。信玄は盆地に城を築かなかった。甲斐が城だった。北条氏は甲斐の黄金を隣国に持ちながらも、一度としてその道を行軍する事はなかった。

物々しい武具をひからせて行軍する軍勢が、静まる月夜に見えた気がした。気遣いが聞こえた。谷に耳を澄ます武者姿が、おそれを見せまいとする侍大将の豪胆さが、臆病な足軽たちの震えを抑えていた。

その光景を僕は見下ろしていた。

時速140キロで集落が後方へ流れ、蛇行する谷が僕から離れ、しばらくしてまた僕のそばにやって来た。

高速は地形を無視するように、高いところを一直線に走っていた。

「なあ、やっぱり速えよ。急ぐ必要はないぜ」

「ん？ 須玉だろ？ 半分来たか？」

「大月で半分くらいかな」

「まだまだかよ」

「甲府を抜けたらもうちょい。まだ乗ってから三十分ぐらいだぜ」

グリーンのデジタルが3:00を指していた。僕らは時間と距離と、速度で競っていた。忙しく友人はステレオのディスクを交換する。しばらくして車内にサックスの音色が響き、友人はそれにくつろぐ。

「どう？ どうよ？ いいだろ？ トニー・G。知ってる？」

「うーん、おれ、実はラッパはあんま馴染めないんだ。ピアノは好きだけど」

「そうかあ、でも、飲みたくなるだろ？ スコッチ限定でさ、くつろいで」

「ああ、分かるよ」

「分かるかあ、やっぱり」

「女には分かってもらいたくない世界だな」

はは、と笑う友人と音色に惚れた。曲が代わると、何度も聞いたブルージーな渋いギターのエントロ。お、と僕が声を漏らし、

「ギターは好きだぜ」

「ヴォーカルも入ってる」

「知ってるよ」

二人で笑った。

いつの頃からだったのかはあまり覚えていない。

しかし、僕はいつのまにか、変わっていた。

気付くと高い所を疾走し、そこから見える景色に感動する男になっていた。

積み上げた経験と技術の集積は、僕を普通ではない人間にしていた。普通人と会話するのに仮面が必要だったし、僕が自分の仕事について喋ると、誰もが不思議そうな顔をした。僕の常識は、普通人の常識ではない。親友の悩みを聞く事ができても、僕のぶち当たったいくつめかの大きな壁について話す事はできない。自分一人で絶壁にはりつき、手脚をちみどろにしてよじのぼるのが日常になっていた。

手脚に、腹に、心臓に、肺に、背中に、頭に、心に数えきれないほどの擦り傷があり、鏡にうつった血だらけの姿にときどき、はっと息を飲む瞬間がある。

いつのまにか巧みに結べるようになった命綱を装着し、そうやって物々しい日常を暮らしている。

ふしぎと疑問は感じない。ただ、自分の姿があまりに物騒なのに戸惑う。

「長えな。どれくらい来た？」

「入るとき四キロって書いてあったからねえ……。もうちょうい」

流れ去るオレンジ色のひかりの中で、僕はぼんやりと地図を見ていた。ステレオは静かな声であなたのいないあさはくるからと、うたっていた。

新倉の長いトンネルを抜けると、七キロも続く下り坂。

ふいに暗い高速の中に、たくさんのテールランプが赤くひかっていた。

友人は速度を上げ、車はトラックの車群にのまれた。

「何か、変な音がする」

「エンジンプレーキ」

「へえ……」

ひっそりしていた深夜高速に、船団のようにかたまって同じような速度で坂を下る。新倉の四キロで追いついたのかとぼんやりしていると、目の前に人工的な星空がきらめいていた。

「すげえな……。前、見える？」

「ああ、きれいだな」

「甲府盆地を見下ろしている……」

限りない夜灯のかがやきに心をうばわれた。追い越し車線を駆け抜けるヘッドライトに地図を照らし、僕は夜景と見比べた。窓ガラスごしに人工銀河を見つけるたびに、その名前を知りたがった。山を這う街灯に有料自動車道の名前があった。

七キロの下りは、さながら宇宙の底へのカタパルトだった。

脇をちらほらと、かがやきの正体が流れていく。僕は、そのひかりに生活する人たちを、街路を走り抜ける自転車のブレーキを、深夜ラジオのしんみりとした声を、ビールの泡によれた歌謡曲の歌詞を、動きはじめた早朝の住人たちのバイクやら、軽トラックやらのエンジン音を、数多くの静かな寝息を聴いた。

夜灯の中に息遣いが聞こえた。

フロントガラスごしの、むすうの星空が生きていた。

対向車線には東京へ向かうダンボールをぎっしりと詰めた船団が、信じられない速度で脇を走り抜けるスポーツカーには前を見つめる男と女が、友人をいらだたせた制限速度を守るワゴンにはおばあちゃんとおじいさんが、それがあまりに短い一瞬にすれちがった。

僕たちは星を見に行く。野辺山の澄んだ空気の底で、天の川を見上げに行く。自分たちの銀河系をみにゆく。

ハイウェイは自由だった。

「はやく、沈まないかな、月。夜明け前に沈むかな？」

「晴れてきたんじゃないか？ 何か、路面が明るい」

「そうか？」

僕はそわそわと月を見る。

「まだ、曇ってる。雲と雲の間……」

僕は流れる雲に心を奪われる。

「ものすごく雲がはやい。晴れるんじゃないか？」

友人は答えない。しばらく見つめて、雲が速いのではない事に気付く。僕たちがはやい。

「甲府、過ぎたぞ。須玉だろ？ あと幾つ？」

「何インター？ あ、うーんと、三つ向こう。そしたら山道」

「近い？」

「うーん、一時間ぐらいかな？」

「間に合うか？」

「多分」

須玉のインターを降りると、友人は山間の自動車道を、高速でも走るように飛ばした。遅いトラックにいらいらしながら、友人は、

「前の遅えな。なにやってんだろ」

「制限速度だぜ、あれ」

「なら、文句は言えねえか……」

登坂車線にトラックが入り、友人はまた速度を上げる。右に左にカーブする暗い路面に僕は少し目眩がする。

「なんか、スキーみたいだな……。百キロ？ スキーでもこんなに出てるのか」

「まさか。こんな速度を出すのはTぐらいさ」

一緒に笑う。それからステレオを操作する。

「あと、どんなもん？」

「電気、点けていい？ うーんと、清里抜けた？ 清里の中心地に二股があるから、そこを抜けると野辺山」

「なんか、随分、都会だけど、この辺り」

「清里だからね。大別荘地帯だよ」

「お、抜けた？ 寂れてきた。げっ、見ろよ。八度だって……」

8℃とひかる電光掲示板と、チェーン装着の看板に驚く。

「おいおい九月だぜ……。なんか、スキー場みたいだな」

「野辺山をなめてたな。半袖一枚はやべーだろ」

「結構、標高があるから。千メートルぐらい？」

「千三百じゃなかったか？」

「内地だし、標高だけでも八度ぐらい違うはず」

「妥当な気温だよなあ。ところで、目的地ってあんの？ どこ向かってんの？」

「とりあえず、野辺山駅付近かな？ 国鉄最高標高の踏み切りがあるはず」

「そのあとは？」

「開けた所で、星みよう」

車はしばらくして駅付近を抜ける。うっすらと白みはじめた東の空を見て、僕は慌てる。すぐさま、

「右に入れる所があったら入っちゃって。人家がなくなったら降りようよ」

「なに？ 大丈夫？」

「あ、左の方がいいかな？ 左の方が標高が高い」

「てきと一だな……。迷ったりしない？」

「左に山が見えるでしょ？ あれがあるから大丈夫」

「なんて山？ あれ」

「八ヶ岳」

車は野辺山高原の牧場が散在する辺りに入り、僕たちは何時間かぶりに外の空気を吸った。冷たくはりつめ、澄んだ外気に半袖一枚で触れ、星空を見上げた。

「あ、まだ月でているか……」

「すげ一月だな……。あんな月、はじめて見た」

夜明けまで時間があるのに、月明かりに見渡す限りの草原が広がっていた。月は山を照らし、僕らを照らし、牧場を照らし、長い距離を疾走した車を照らしていた。アスファルトの上で星を見上げ、友人は草地に踏み入った。

「なんか聞こえる。人の声？ あ、ラジオかな？」

「今、何時？」

「四時半を少し回った」

「結構、速かったな。山道で、一時間くらいかかるって言ったのに」

「ぐにゃぐにゃしてから、そう思ったんだよ。ちょっと飛ばし過ぎだぜ。怖かったよ、正直」

友人は答えずに星空を見ている。月光に照らされ、ほれぼれと気持ち良さそうなその顔を見て、僕は悟った。

—スピードが好きなんだ……。

そう思った瞬間、友人との十年近い付き合いで見た全てがそれを肯定し、自分がそうでない事を悟った。深夜ドライブの彼なりの目的が分かった気がし、僕はぼんやりと自分を振り返った。

月明かりは何もかもを照らしていた。

ありありと自分の姿が見えた気がした。

僕は、心のスピード狂。

いつでも、お気に入りのハイウェイを探している。

助手席が怖がっても、静かなポップソングを鼻歌にハイウェイを飛ばす。

その姿があまりに怖かった。

果たして、僕の見ているものが伝わるのか？

助手席は、駈け抜けていく架空の人々の鼓動を、僕が頬に感じる呼吸を、多彩な感情を、しなやかな身体を、躍動する生命を、それ以外のあらゆる全てを、同じように感じられるのだろうか？

目的地を目指して疾走する車窓を流れる一瞬。それが、

「おい、あれなんだ？ 前の方が白いぞ」

「え？ 雲海じゃないか？ ここ下ってるし、あの山の下に谷があるんだよ」

「まさか……」

「空気が澄んでいるから、遠くまで見えるんだよ、多分」

「そんなに標高が高いか？」

「信じないのか？」

友人はしばらく考え、澄んだ冷気にぶるりと震え、ぱっと表情を輝かせる。

「じゃあ、行ってみよう。遠いか？」

「地図見ないと分からん」

車内に戻り、室内灯を点けると、友人はハンドルに両手を置き、言った。

「暖けえな、やっぱり、車の中は」

暖色の豆電球に照らされた、友人の顔は穏やかだった。

心を弾ませ、ぼんやりとした明かりに指で現在位置を探しながら僕は、何か続きが書けるような気がしていた。

<了>